

天正14年（1586年）の洪水による 木曽川河道の変遷と天正地震の影響について

飯 田 汲 事

The Alteration of the Kiso River Course due to the 1586 Tensho River Flood and the Effect of the 1586 Tensho Earthquake

Kumizi IIDA

The main course of the Kiso river running through the Nobi plain was altered to that of the present state at the time of the Tensho river flood of August 9, 1586. This alteration of the river course may be explained as the result of the land deformation such as land subsidence and fault breaks caused by the Tensho great earthquake of January 18, 1586, which occurred in the southern part of the river mouth of the Kisogawa.

1. まえがき

濃尾平野を貫く木曽・長良・揖斐の三大河川流域の低地一帯では、昔から降雨時にしばしば河川がはらんして洪水となり、大きな水害を発生してきたことは、木曽川の治水史などから知られるところである。このような状況のもとではあるが、木曽川の流路の変遷は4回ほどの記録しかないようである。そのうちの一つである天正14年6月24日（1586年8月9日）の洪水により、木曽川の河道が現在のように変わったことが記録されている。

この天正洪水はそれ以前及び以後にあった大洪水ほどではなく中級程度のもと思われるが、その河道をかえ現在のような流路となったのには他の要因があるのではないかと調べたところ、この洪水の起こる約6ヵ月半前の天正13年11月29日（1586年1月18日）に天正地震が起こっている。この地震は最近までその全容をつかむだけの資料がなかったが、資料の収集によりその震源域は伊勢湾内であることがわかった。そこでこの天正地震の地変が木曽川の流路の変遷に大きな影響を及ぼしたものと考えられるので、それについて述べようと思う。

2. 天正14年前後と江戸時代までの木曽川洪水と河道の変遷¹⁾²⁾³⁾

木曽川は今から約1360年以前は鶉沼川または広瀬川といい、また長良川や揖斐川は木曽川の支川であった。河

道は鶉沼、犬山、更木をよぎり墨俣で長良川と合流して南流していた。その時代の河道の概要を西畑等の報告¹⁾²⁾により示すと図1のようになる。この図は現在の図面上に書いた昔の木曽川の河道であるが、下流の陸地は大分ちがうものと思われる。日光川も木曽川の分派川であり、揖斐川も下流では木曽川と合流していたり、分離したりしてまた河口で一緒になっていた。

木曽川の水害を資料¹⁾²⁾³⁾から求めると、その最も古い記録としては大化5年（649年）秋の西濃粕川の大洪水がある。次は神護景雲3年（769年）8月9日及び9月8日の鶉沼川の洪水で葉栗・海部・中島3郡が水害となり、河道を変えるほどの大洪水であった。9月8日の水害では国分寺が2寺流失している。宝亀6年8月22日（775年9月25日）の風水害では木曽川がはらんし、沿川の地で死者300人・牛馬1000頭・国分寺諸寺院19被災した。その後平安朝時代の斉衡元年（854年）、貞観13年（871年）ごろ木曽川分流広野川がはらんし、延喜13年（913年）に揖斐郡春日村に出水した。また天曆2年（948年）に本巢郡に、天元3年（980年）及び長徳3年（997年）に揖斐郡春日村に出水被害があった。

鎌倉時代では建暦2年（1212年）、文永3年（1266年）に木曽川出水被害があり、室町時代の長禄2年（1458年）に尾張の洪水、永正6年（1509年）、永正7年（1510年）の木曽川出水、享禄3年（1530年）の根尾川洪水で流路の変遷があった。天文3年（1534年）郡上川洪水で下流

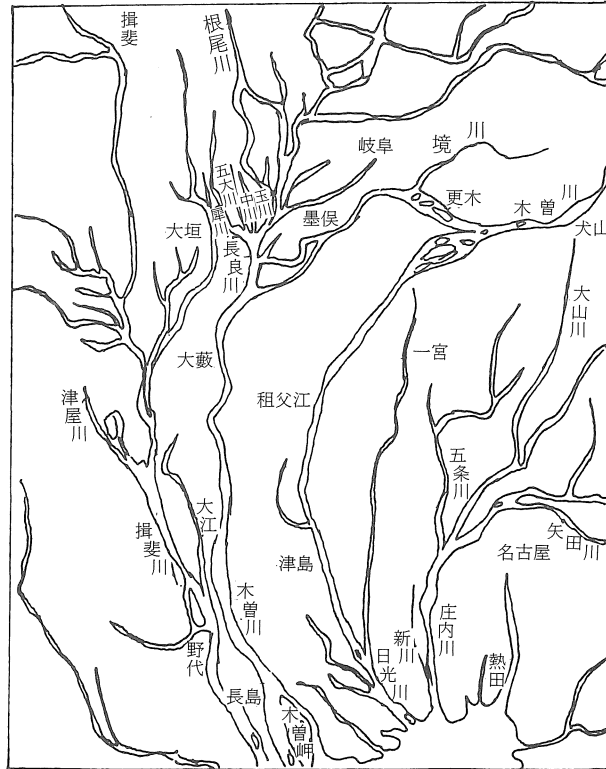


図1 昭和58年から1348年前の大化以前の木曾川流路を現在の地図上に書いた図(文献1)2)による)
木曾川流路は更木—墨俣—大藪となっており境川や長良川を合流していた。

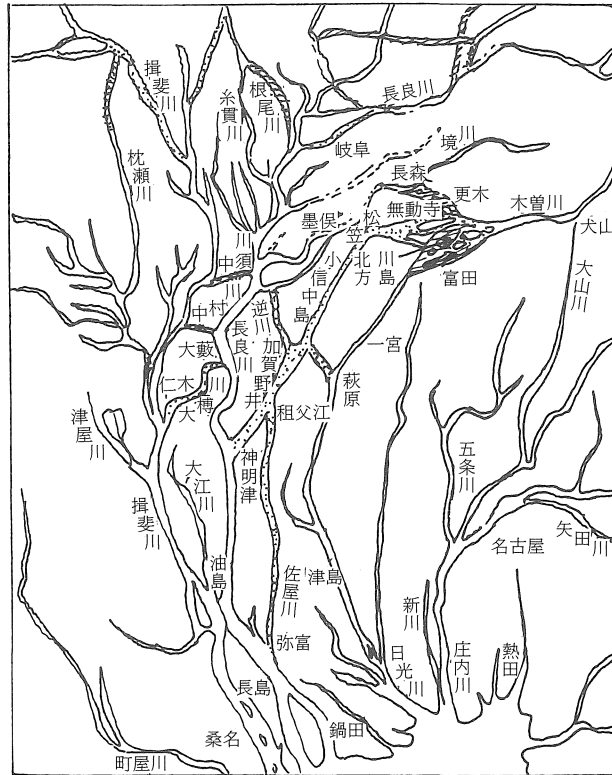
に新川ができ、家屋流失死者多数がでた。天文13年7月9日(1544年8月7日)の風水害で木曾川がはらんし、起町が水害をうけた。

安土桃山時代では天正14年6月24日(1586年8月9日)の大雨で木曾川が洪水となり、尾張・美濃の両国の沿川地域は大被害をこうむった。木曾川河流は美濃国各務郡前渡村と尾張国葉栗郡草井村(現江南市内)の間から西で現在のように変わった。尾張の葉栗・中島両郡では激流が村をつらぬいて人や家を流し、新しい河道ができ、富田庄・三谷郡等は新河道となった。慶長2年(1597年)の大雨で木曾川出水し、丹羽郡山那村(扶桑町山那)の田畑・家屋が被害をこうむった。

江戸時代では慶長11年5月25日(1606年6月30日)の暴風雨で葉栗郡江川村の堤が切れて出水し、慶長13年4月21日(1608年6月3日)尾張洪水で堤防所々損壊した。慶長15年5月3日・7日・22日(1610年6月23日, 27日, 7月12日)の大雨で木曾川洪水、慶長15年6月12日(1610年7月31日)の長雨・大雨で木曾川出水、尾張側堤防が

犬山から中島郡加賀野井(尾西市)の間で数カ所決壊した。慶長17年4月(1612年5月)大雨で木曾川の尾張側堤防所々決壊(海部郡勝幡村殊に多し)。同年6月26日(1612年7月24日)の長雨・大雨で尾張洪水、立田村の堤防決壊し津島まで川水が浸入した。慶長19年4月27日(1614年6月4日)の大雨で尾張海東郡勝幡村の堤防が決壊し、田畑に被害があった。元和3年(1617年)揖斐川筋安八郡で破堤が多かった。元和5年8月(1619年)大雨で江川村の堤防が切れ、木曾川の河道が少し変わった。寛永3年5月16日(1626年7月8日)大雨で前渡村堤防決壊、寛永8年(1631年)の大雨で長良川洪水となり、破堤100余間に及んだ。寛永10年5月3~10日(1633年6月9~16日)の大雨で木曾川に分派川佐屋川が破堤して、尾西地方一帯が浸水し、田畑の被害約3万石であった。寛永18年(1641年)木曾川筋稲葉郡各務村では580間破堤した。

図2には木曾川河道の江戸時代初期の状態を西畑原図²⁾に加筆して示したが、木曾川は往時現今の境川を流れ



変遷流路

図2 1586年の天正洪水後の木曾川の変遷を現在の地図上に書いた流路（文献 1）2）による
無動寺—笠松—小信中島—加賀野井—神明津の木曾川幹川流路となる。

ていたのに、天正14年6月24日の洪水により、前渡村と尾張国草井村（現江南市内）との間で西進し、上中屋無動寺の各村を通り、川島村の松林寺島水田島等を流亡し、円城寺と北方の間を貫き、笠松田代の辺から南に曲って富田庄、三ツ吾の二カ村を流亡して小信中島からさらに南流した。その後元和5年に河道が少しく変わったが、この時駒塚村、加賀野井村の間に逆川を分派し、また南流小藪村で長良川と合し、以来大河であった境川は小流となった。斜線部分は変遷以前の河川で点線部分は変遷流路を示している。

慶安3年9月1～2日（1650年9月26～27日）の大雨で木曾三川が大洪水となり、各所で破堤し、美濃沿川地方に大被害を生じた。これは大寅の洪水といわれ、尾張では木曾川堤防が加賀野井（尾西市）で決壊した。また佐屋川堤防が決壊し、川水が海東郡・海西郡へ流入して尾西地方一帯の住家・田畑に大被害を及ぼし、3,000余人・馬が死亡した。慶安4年8月（1651年）には海東・海西両郡に洪水浸入し家屋を流失し人馬が多く溺死

た。承応2年（1653年）には松本村の内堤が切れ、承応3年（1654年）には江川村の内堤が切断した。万治3年5月～6月（1660年）の長雨、大雷雨で尾張・美濃が洪水となり、人家が多く流れ、大垣城内も浸水した。寛文5年（1665年）飛騨川洪水で田畑家屋の被害が大きかった。寛文6年7月16～17日、28～29日（1666年8月16～17日、28～29日）の大雨では、尾張・美濃の各河川が洪水はらんし水害をうけた。寛文6年8月1日（1666年8月30日）の暴風雨で尾張・美濃両国洪水により大水害をこうむった。尾張領内の被堤カ所70km余、家屋245軒、死者6人、馬4頭死亡した。延宝2年8月16日（1674年9月15日）の暴風雨・洪水で木曾川がはらんし、美濃・尾張の沿川地方は大被害をこうむった。これは小寅の洪水といわれている。天和3年（1683年）揖斐・長良両河川洪水で被害が大きかった。元禄14年8月9～12日（1701年9月11～14日）の大雨で尾張・美濃の諸川は出水はらんし、堤防破壊が53カ所で、慶安3年の洪水よりも2尺ほど高かったという。元禄15年8月29日（1702年9月

20日)の暴風雨で、佐屋川水系の海東郡津島の兼平堤が見越地内で破壊し、海東郡は大水害をこうむった。正徳3年6月6～8日(1713年7月27～29日)の暴風で犬山城天守閣がおち、家屋被害が12,000戸に達し、7～8日尾張西部から浸水し、家屋流失人馬の被害が大きかった。

正徳5年5月17日(1715年6月18日)の暴風雨で、木曾川派川の佐屋川堤防が津島町付定で破壊した。

享保12年3月13日(1727年5月3日)の大雨で、佐屋川がはんらんして破堤し、海東・海西郡に浸水し麦作皆無となる。

元文3年夏(1738年)暴風雨で、佐屋川堤防が海西郡赤目村で破壊し田畑が水害をうけた。

寛保元年秋(1741年)大雨で、木曾川が出水し、鰐浦(現弥富町)で堤防が決壊し、十四山・飛鳥・永和各村の海岸部落は大水害をこうむった。

宝暦3年6月4・5日(1753年7月4・5日)大雨で、佐屋川津島神社の神領堤が45m切れ、付近屋家が軒まで浸水した。

宝暦3年8月16日(1753年9月13日)大雨で、中島・海東・海西各郡の木曾川筋が洪水となり、濃州今尾曲輪中・高須曲輪中に水入り田畑の被害が多かった。宝暦洪水として知られているのは宝暦4年(1754年)から翌5年にかけて、薩摩藩の御手伝普請として行われた濃州・勢州・尾州の三国にわたっての河川洪水工事である。

宝暦7年4月下旬～5月上旬(1757年5～6月)長雨と5月2・3・4・の大雨で西部洪水、枇杷島から四方が海ようになったという。佐屋川は津島・大野山新田で切れた。この洪水は宝暦の洪水といわれている。

宝暦7年8月22日(1757年10月4日)大雨で木曾川10合の大水となり、駒塚巴堤が切れた。明和3年(1766年)木曾川大水となり、羽栗郡米野村の堤防が35間切れ、村々に入水した。明和4年7月10～12日(1767年8月4～6日)の大雨で、木曾川大水となり、中島郡奥村などで尾張側へ浸水した。これは明和の洪水として知られている。

天明6年2月17・28日(1786年3月15・26日)の大雨で木曾川が1丈5尺出水し村々の被害が大であった。佐屋川も増水し津島神社に浸水した。

寛政元年8月8日(1789年9月26日)暴風雨で木曾川が洪水で破堤750間に達した。

寛政10年4月8・14日(1798年5月23・29日)の長雨・大雨で、木曾川筋が大洪水となり被害が多かった。無動寺村で52間、江川村で60間、米野村で52間及び19間、石田村で95間及び20間、中屋村で15間の計7カ所一時に破堤し、また長良川筋でも3カ所切れ、岐阜市に入水した。加納城下は木曾川・長良川の洪水合流し、笠松より南方は海の如くであった。

文化元年8月28・29日(1804年10月1・2日)の暴風雨で諸川が出水し、死者80余人となる。

文化8年6月24日(1811年8月12日)の強雨で、長良川その他の諸川が出水し、破堤2,000間に及び死者数十名となる。

天保8年8月14日(1837年9月14日)暴風雨で尾張・三河の諸川がはんらんし被害が多かった。

天保13年(1842年)大雨で木曾川がはんらんし葉栗郡草井村(現江南市)の家屋40軒、耕宅地25haが流失または被害をこうむった。日付は5月18日(6月26日)ともいわれる。

嘉永元年8月8・9日(1848年9月5・6日)暴風雨で各河川が出水し、ところどころ破堤して浸水し、家屋の被害があった。

嘉永4年(1851年)の暴風雨で津保川、可児川が洪水となり被害が多かった。

慶応元年閏5月18日(1865年7月10日)の大雨で諸川洪水にて家屋が流失し、人畜の死亡も多かった。

慶応2年8月6・7日(1866年9月14・15日)の大雨・暴風雨で諸川が洪水となり、破堤カ所も多く、出水のため家屋の被害多く、死者9名を出した。

以上は江戸時代までの洪水と災害についてその概要を示したが、明治以後においても洪水が多いにもかかわらず木曾川の河道を変えた記録は前述のように4回ほどしかない。被害を生じた主な洪水をみると、前述のように西暦649年から1866年までの1217年間に約65回であるが、慶長～宝暦年間(1596～1763年)の145年間に110回も水害を生じたというから、洪水が多く繰り返されたものと思われる。前述の約65回のうちでも大洪水に属すると思われる出水は14～15回であるが、木曾川河道の変遷はその大洪水の度毎に行われたのではないことがわかる。河道の変遷は天正洪水の前に769年と1530年の2回あり、このうちの1回1530年のは根尾川の洪水での流路の変遷であり、天正洪水後の1回は1619年の流路の小変遷であるから、結局木曾川河道の変遷は769年と1586年の2回が大きかったといえよう。この2回目の河道変遷は天正地震の地変が影響し、洪水によって顕著に表われたものと考えることができよう。

3. 天正地震の概要と地変

天正13年11月29日(1586年1月18日)亥刻(23時)に畿内の山城・大和・摂津、東山道の近江・美濃・飛騨、東海道の尾張・伊勢・三河等の諸国にわたって大地震が発生した。この地震は最近の研究⁴⁹⁾により、震源域は伊勢湾北部域で、震央は東経136.8度、北緯35.0度と推定され、地震規模Mは8.2と算定されている。

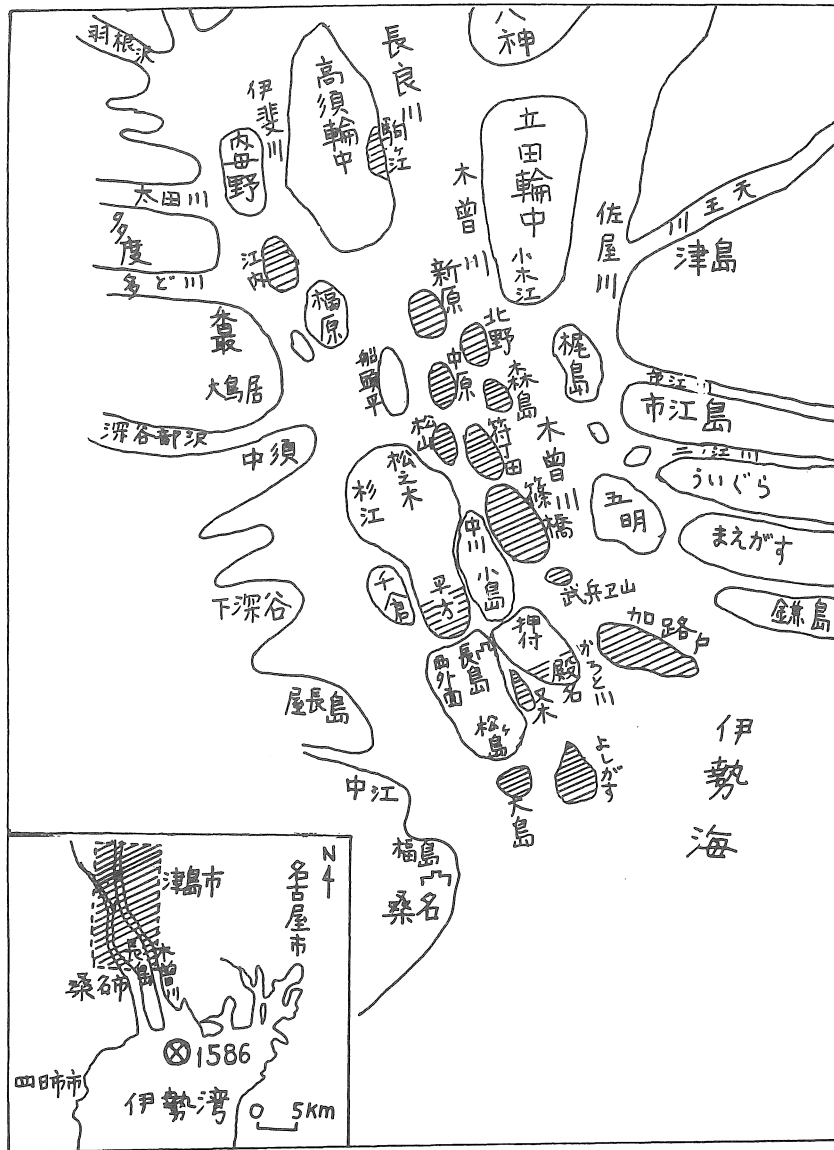


図3 天正地震における木曾川河口・伊勢湾北部地域における諸島の沈没（陰影部分は沈没を示す。）⊗は震央。

この地震による被害として、死者は約8,000～9,000人、家屋・寺社等の倒壊は9,500～15,000と推定され、伊勢湾には津波も発生して被害を多くしている。木曾川下流域においては多くの島々が沈没し、東山道及び東海道の各所における城郭が倒壊または大被害を受けた。すなわち主な島では加路戸・見入・中島・篠橋・符丁田・森島・北野・新倉・江内・中原・殿名・又木・鎌ヶ池・葭生・駒江・大島・長十郎起こし・善田等の沈没をおこした。これらは木曾川下流域に発達した島々であり、図3に示した位置である。

城では長島城・桑名城・大垣城・亀山城・長浜城・新洲城・加路戸城のほか小規模な篠橋・善田等が倒壊し、飛驒の掃雲城、越中の木船城も埋没した。また岡崎城は大破し、浜松城は小被害をこうむった。

この地震の地変をみると沈降域は津島・佐屋・西新田（十四山村）、鎌島（弥富村）、多度・長島・海津、一宮等となっており広範囲の影響が考えられる。

地震による山崩れ、地すべり、山津波などが各所で起こった。飛驒・越中においては白川・庄川流域における

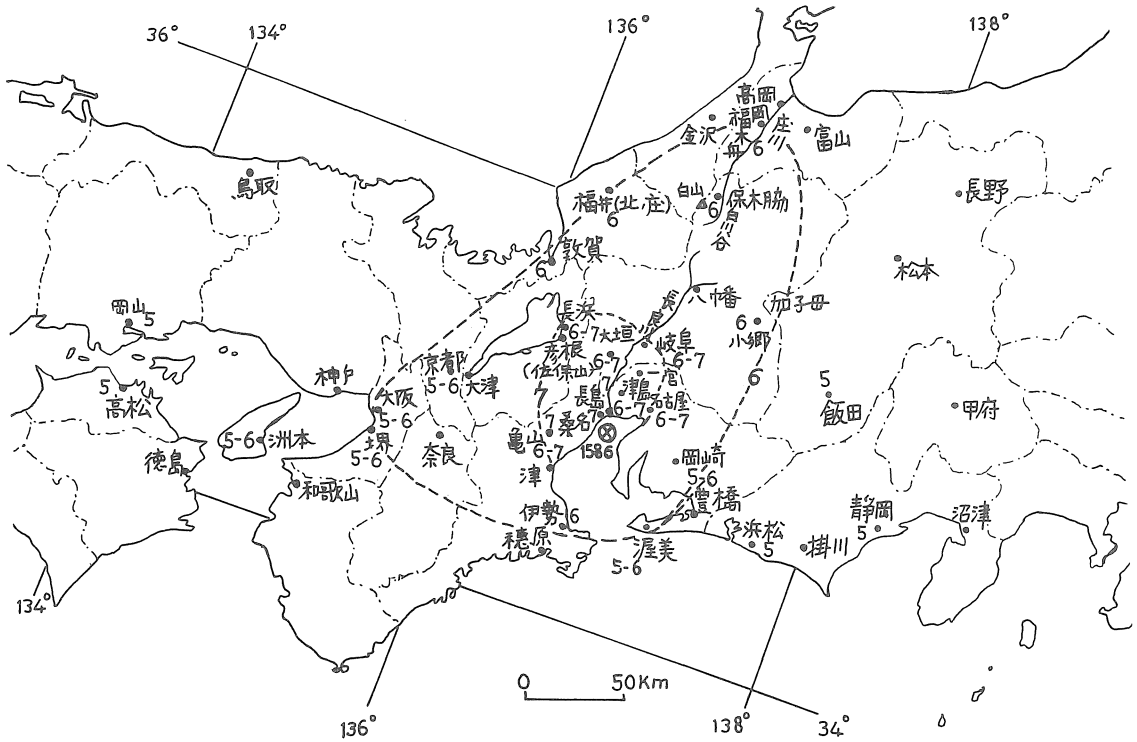


図4 天正地震の推定震度分布(破線でかこんだ二つの地域内がそれぞれ震度6及び7と推定される)

山崩れによる城や家屋の埋没、越中の小矢部川流域における山崩れや山津波による城や家屋の陥没埋没、部落家屋の流失などもあった。

この地震の被害及び地変等から震度分布を求めた結果を図4に示したが、この図をみると震度6は長良川から庄川の方に延びており、また大垣から敦賀の方向に震度7が延びている。若狭湾や琵琶湖においても海水・湖水の動揺がはげしく津波のような高波が発生し被害もあった。これらの結果から判断すると、この地震は養老断層の活動及び木曾川・長良川沿いの断層生成の可能性を示すものと考えられる。

この地震は伊勢湾を震源として発生したが、その後の明治24年(1891年)10月28日に発生した濃尾地震(M8.1)とともに陸域地震である。マグニチュードM8以上の陸域地震はわが国ではこれ二つの地震だけである。濃尾地震は根尾谷断層を中心として発生したと思われるが、天正地震は養老及び木曾・長良川沿いの断層を中心として発生したのと考えられる。

この地震はその震度分布からわかるように、きわめて広範囲にわたり地変及び被害を発生しており、現在の木曾三川流域での地盤変動がかなり著しかったものと思われる。1891年10月28日の濃尾地震⁶⁾、1944年12月7日の東南海地震⁷⁾の際においても木曾川下流の地盤変動が大き

かったのである。

4. まとめ

天正14年6月24日(1586年8月9日)の大雨で木曾川が洪水となり、沿川地域は大被害をこうむったが、この洪水により河道が変わった。すなわち木曾川は前渡から西流して現今の境川筋を経て墨俣に至り長良川を合流して南流し、さらに油島に至り揖斐川を合していたが、天正洪水の後、前渡から西流するその幹川は笠松から西南に方向を転じ現在の河道をなすに至った。この時河道は小信中島に至って二つに分派し、一つは南東に転じて現在の日光川筋を経て海に注ぎ、他の一つはさらに逆川に加賀野井を経て神明津で長良川と合流する河道とに分流した。

このような木曾川河道が現在のようなものに変遷したその主要な要因は、天正13年11月29日(1586年1月18日)の伊勢湾北部を震源とする大地震の発生による地変であって、地震時の津島から一宮一带にわたる沈降地変、木曾川・長良川付近の地変・断層などによる地盤変動が影響したのと考えられる。この河道変遷の地域は震度が6から7になった所であり、濃尾地震などの例から考えられるように、かなりの地変・断層などの出現も予想されるところである。すでに述べたように天正14年の洪

水は江戸時代までの洪水のうち最大級の洪水ではなかったし、天正洪水前後の大洪水においても河道の変遷は必ずしもみられなかった。それが中程度の洪水によって河道が大きく変わったのは、その約半年前に起こった天正地震により地盤が、変動を受けていたため、洪水を契機にその沈降地帯または断層線付近に流路をとるようになったことによると考えられる。

参考文献

- 1) 建設省中部地方建設局監修：木曾三川その治水と利水，国土開発調査会，pp.18-22，昭和58年10月
- 2) 西畑勇夫：木曾川三川の治水史と今後の治水計画について，西畑勇夫先生記念会，pp.1-35，昭和54年12月
- 3) 名古屋気象台監修：愛知県災害誌，愛知県，pp.45-112，昭和45年3月
- 4) 飯田汲事：歴史地震の研究(1)，天正13年11月29日（1586年1月18日）の地震の震害，震度分布および津波について，愛知工業大学研究報告，No.13，pp.161-167，1978
- 5) 飯田汲事：天正地震（1586），明応地震（1498）の地震と津波災害について，自然災害資料解析，7，pp.170-182，1980
- 6) 飯田汲事：明治24年10月28日濃尾地震の震害と震度分布，愛知県防災会議，pp.1-304，昭和54年
- 7) 飯田汲事：1944年東南海地震の地変・震害および発生について，愛知工業大学研究報告，No.11，pp.85-94，1976
- 8) 飯田汲事：昭和19年12月7日東南海地震の震害と震度分布，愛知県防災会議，pp.1-104，昭和52年（受理 昭和59年1月17日）